

報告

2024年6月18日に、東北アジア研究センターの客員准教授として滞在中のヤロスラワ・パナコワさんによる研究発表と彼女自身が監督を務めた映画発表は、シベリア・チュコトカ民族誌に関わる伝統的生死観と、現実の社会問題としての自死とを取り上げる興味深いものだった。

CNEAS Anthropology Seminar

講演 Multiple Personhoods. About the Phenomenon of "Return" and the Possibilities of Visual Research

映画上映 Five Lives (75分、言語：ロシア語、英語字幕)

映像制作・話者

PANÁKOVÁ Jaroslava

Senior scholar at the Institute of Ethnology and Social Anthropology, Slovak Academy of Sciences, Visiting Associate Professor at the Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University

現地の先住民族であるチュクチの人々のあいだでは、パスポートなどで用いられているロシア風の名前以外に、チュクチの名前がある。それは「よみがえりの名前 (return name)」とも呼ばれ、過去の祖先が現在の人物によみがえったと人々は考えるのである。ただそこでは仏教的な輪廻転生のニュアンスはなく、多層的な人格がこの地域に存在し、その構成要素の一つが祖先であるということだった。この現象についての社会人類学的な報告が行われたあとに、映画が写された。

そこでは、チュコトカの定住村落で頻繁に発生している「自死」について、人々が語り、またそれにどう対応しているのか感情が写し出されている。それは確かに深刻な社会問題であり、解決が求められる事象であるが、映画はその現実に人々がどのような関わっているのかを、ただ黙ってたたずんで理解することを視聴者に求めているように思われた。通常、社会問題があれば、ある意味で普遍的な解決策が提起されなければならないと我々は考える。しかしこの映像制作者は、それがどのような社会的文脈にあるのか、民族誌的なアプローチが必要であることを伝えようとしているように思われた。たとえば、寒さのなかで眠ってしまい命を落とした男性についての語りもあった。それは死が偶発的なものであれ、自発的なものであれ、死によって親族を失うことはどのような経験なのかを示しているとも言える。

カメラをもったヤロスラワさんにむかって、身近な人の自死について語る人々の内容は、断片的で、意味が時々途切れがちになる。しかし様々な人が違った角度で「自死」を語るのが蓄積されるとぼんやりとして意味が伝わってくる。また彼女たちは、自らの日常空間のなかで語っており、話の内容以上に、この人々がどのような社会的条件におかれているのかを映像は物語っていた。時折、現地の風や雪の音のイメージや子どもたちの姿が象徴的に画面

に挿入されており、それはチュクチの人々が我々とは異なる時間を生きていることを暗示するものだったのかもしれない。

そうした描写のなかで登場人物達によって「よみがえりの名前」が言及されていたのが印象的であった。人類学者は通常こうした慣習を、民族や地域の文化として体系的に説明することをおこなう。しかし現地の現実では映像で描かれた断片的な光景のなかで慣習が存在しており、そのことの意味を考えるべきだと訴えているように思えた。(高倉浩樹・ゴレーセバスチャン)

